

ことばが生まれる基盤にあるもの

東海大学健康科学部社会福祉学科 小林 隆児

これまで自閉症の基本障害として言語認知障害が強調されるとともに、その存在が脳障害と深く関連づけられて語られてきた。わが国の多くの自閉症研究従事者はこうした考えに同調してきた。しかし、残念なことに言語や認知という人間の高等な精神機能がどのようにして獲得されていくのか、その過程にまで踏み込んで論じられることはほとんどなかった。自閉症児の語ることばをひとつひとつ取り上げて、その特徴を探求することには熱心であっても、語られることばがどのような文脈で、どのようなコミュニケーション的意味合いをもったものであるのか、丁寧に検討していくという方法が取られることは少なかった。自閉症児とわれわれとのコミュニケーションを考えてみると、少なくとも当事者として自閉症児の他にわれわれ自身の存在も無視することはできない、というよりも関係そのものを抜きにして語ることなどできるはずもない。しかし、なぜかことばの問題がすべて自閉症児個人の病理的現象として検討されてきた。これまでの学問の多くは、近代科学のいうところの科学性を重視するあまり、「客観性」「論理性」「普遍性」を旗印にして、努めて対象を客観的なスタンスで捉えてきた。その姿勢がこれまでの自閉症の言語障害研究にも濃厚に反映している。しかし、このようなスタンスがいかに多くの問題を孕んでいるか今一度考え直してみる必要がある。

分かりやすい例を取り上げてみよう。ある対象、たとえば「机」がここにあったとしよう。それが「机」であることは自明のことであるとわれわれは思いがちである。ある対象は一義的に意味が決定づけられていると考えやすい。しかし、われわれがそれを「机」と意味づける（認識する）際には、その対象のもつ多様な性質（たとえば、表面の性質、材質、大きさ、重さ、形態、用途などなど）の中からある性質（主に用途）に着目して、「机（書物を読んだり、字を書いたりする時にも用いる台）」と呼んでいるに過ぎない。ある時、疲れていた誰かがその「机」の上に座ったとしたら、それはその人にとってその時は「机」ではなく、「椅子」であるとしか言いようがない。たしかに、この対象はまさに「机」として作られているのであるから、それをわれわれも暗黙のうちに感じ取って「机」として捉えているということ是可以する。一見すると「机」としか言いようがないと思いがちなのは、われわれの認知の営みには（作者の意図を暗黙のうちに感じ取るといった）暗黙のうちに働いている心の働きが重要な役割を果たしているからである。つまり、認知の営みは単純にこれは何々であるというように、冷めた態度で中立的に捉えられるようなところの働きではない。

自閉症の人々への関係支援を行っていると、そのことをわれわれに教えてくれることが多い。これまで長い間嘱託医として関与してきたある自閉症者専門入所施設で数年前職員から教えられたエピソードは筆者にとって非常に印象的なものであった。ある成人期に達した自閉症者はなぜか他者からもらったおやつを直接手にとって食べることはできなかった。しかし、偶然それが床に落ちていたらそれを拾って食べることはできたという。日頃の生活の中で彼は周囲に対して非常に警戒的な態度で、まるで全身にアンテナを張り巡らせているかのようであった。

そして、身の回りの物事をいつも同じような状態に保とうとする気持ちが大変強いのが特徴であった。よく見かける同一性保持とかこだわり行動として捉えられてきた自閉症に特徴的な行動である。たとえばドアが誰かに開けられると、彼は単に元あったようにドアを閉めようとするのではなく、ドアを開けた人に直接そのドアを閉めさせないと気が済まなかったのである。これまでわれわれはこのような行動を捉える時、自閉症の病理的行動とみなし、背景になんらかのこだわりを想定することはあっても、このような行動が認知の働きのある側面をよく描き出しているということに思いは至らなかったように思う。

最近、筆者は彼らの外界の認知のあり方を考えていて、このようなエピソードは彼らの知覚と認知の特徴を実によく描き出していることに気づいた。それは何かといえば、人間の誕生直後の未だ人間らしさを充分には身につけていない発達段階における原初的知覚のあり方を示しているということであった。振り返ってみると、われわれも一見すると何も変哲のない物を後生大事に身につけていたりして、その物への強い愛着を抱くことは少なくないが、このように実はわれわれも対象を認知する際に、けっして冷めた態度でこれは何々だと捉えているのではない。対象認知の背後には多かれ少なかれ情動的な色彩が帯びているものなのである。彼が他者からもらった「おやつ」を手にとって食べることができなかったのは、その背後に某かの他者の気配を感じさせ、それが彼にとっては侵入的な相貌性を帯びたもの（警戒すべき対象）に映っているからなのではないかと思うのである。われわれにとっては一見すると単に「おやつ」であると思いがちであるが、このような現象が起こるのは、原初的知覚様態にある彼にとっては対象があまりにも生々しく映るとともに、それが彼の不安を駆り立てるようなものに映っていたからなのではないか。さらには開いたドアを彼が捉える際には、ドアだけを切り取って認知するのではなく、ドアが開いた時の状況、流れといった文脈そのものをも含み込んだもの全体を捉えているのであろう。そのためドアを誰がどのような状況で開けたのかということが彼にとっては重要なことになっていたのではないか。全体の一部分が変わることは彼にとって全体の様相が変わるほどの重みをもっていたからではないか。このような対象の捉え方こそ原初的知覚の特徴そのものであって、このような知覚や認知のあり方を単に病的だと決めつけることはできない。発達論的視点に立って見た時、はじめて彼の行動のもつ意味が明らかになってくる。われわれにとって彼の行動が一見奇異に映りやすいのは、彼に限らず自閉症の人々では迫害的な情動不安が基盤にあることが少なくないために、対象を捉える際にそのことが前面に出てしまいやすいからである。

以上指摘した対象認知の基盤に働いている原初的知覚様態の存在は、自閉症の人々の対象知覚のあり方を決定づけるほどに大きな意味を持っている。身の回りの対象を自分に対して侵入的なものとみるか、それとも好奇心を駆り立てるようなものとみるか、それを決定づけるのは彼らのこころの中に安心感がしっかりと育まれているか否かということである。そのためには彼らがわれわれとのあいだにしっかりと甘えられるような関係が生まれる必要がある。

今でも自閉症の子どもに絵カードや実物を見せながら言語治療と称して働きかける光景を時折見かけるが、そもそも対象のもつ意味を捉えるという営みはどのような過程を経て獲得されていくのか、そのことをもっと深く考えてみる必要がある。われわれは知らず知らずのうちに、

対象の捉え方、着目の仕方などを暗黙のうちに獲得し、誰もがみんな同じように対象を捉えるようになっている。だから共通の意味を体得できるのであって、もし対象の捉え方、着目の仕方（知覚のあり方、意識の向け方などといってもよいかもしれない）そのものが異なっている場合には、そこに共通の意味を見出すことは困難になる。つまりはそこでは対象の持つ意味は必然的に異なってくるのである。

自閉症児とわれわれとで対象への関心の向け方がいかに異なっているか、そのことを筆者は大学の臨床研究の場である Mother-Infant Unit で幾度となく痛感させられてきた。目の前にある「トランポリン」を見て、われわれは子どもをその上に乗せてやっ飛ばせようとするが、その時子どもは「トランポリン」の縁のそばに座って目を凝らして眺めていた。その子は「トランポリン」のネットの網の目模様を心奪われていた。こんな時、われわれはその対象をまさに「トランポリン」と認知しているが、その時のその子どもはそうではない。明らかにその対象の異なった性質に着目していたのである。しかし、われわれはそのことに気づかず、当然それは「トランポリン」であるかのようにして子どもに働きかけている。ここで認められる対象の捉え方の相違は、その対象の意味を獲得していく過程と深く関係してくる。つまり、われわれは日常ほとんど意識することなく、対象の捉え方を一義的なものと考えながら、子どもに働きかけている。しかし、もしもこのように対象の捉え方（関心の向け方）に大きなずれが存在しているとしたら、その働きかけは慎重にならざるをえなくなるであろう。

最近、筆者は小書「自閉症とことばの成り立ち」を上梓したが、本書での中心的テーマは、先に述べた言語認知機能の獲得過程である。このテーマを徹底して考えてきた今痛感するのは、われわれが当たり前と考えてきたことを根底から疑うという姿勢を持つことの大切さとともに、われわれが何気なく働きかけていることの中に、これまでわれわれが気づけなかったことがいかに多いかということである。つまり、通常は意識しないが暗黙のうちにやっている行為そのものの中に、実は重大な意味が隠されているということである。そのような行為にお互いが影響を受けながら、コミュニケーションは展開しているのであって、このような気づきにくいことを丁寧に取り上げていくことによって初めて、ことばがどのようにして獲得されていくかというコミュニケーションの問題の本質に触れることができるのではないかと思う。

なお本稿は、くさぶえの家通信（第 11 号）の巻頭言の草稿に大幅な加筆を行ったものであることをお断りしておく。

<参考文献>

小林隆児(2004). 自閉症とことばの成り立ち－関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界－. ミネルヴァ書房.